京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の3年目)

1. 研究課題

「日本の伝統文化」を問い直す

Reconsidering the Concept of "Japanese Traditional Cultures"

2. 研究代表者氏名

重田みち

Shigeta Michi

3. 研究期間

2020年4月-2023年3月(3年目)

4. 研究目的

明治期以来「日本の伝統文化」の重要な一翼をなすものと位置づけられ、紹介されてきた芸道文化一茶道・能楽・花道・蹴鞠等、及びその空間を構成する建築・庭園・絵画・器物等の文物一は、実際のところ、中世以来の芸道文化の実態を忠実に反映してはいない。①「日本」文化とは言っても実際には大陸文化的性質が強い、②芸道文化を規定してきたとされる「禅」文化にしても、実際のところ様々な思想的・文化的要素から複雑に構成されており、単線的な影響関係を想定することが困難である、③欧米に対抗するために近代日本が要請したのが「伝統」という権威付けであり、結果、芸道が古来変わらぬものであるかのような静態的な印象を仮構している、等々の問題点である。そのような理解によって不可視化された芸道の様々な面に着眼し、あらためて歴史的・実証的な考察を加え、近代以降の理解を乗り越える視座を獲得することを本研究班の目的とする。

This project addresses so-called "Japanese traditional culture". This refers to the geidō culture (geidō) that includes the tea ceremony, Noh performance, flower arrangement, kemari (traditional Japanese football game), and other forms of art as well as architecture, gardens, paintings, and artifacts, [all of which comprise the cultural 'space'. These artforms have been regarded as an intrinsic part of ""Japanese traditional culture"" since the Meiji era. Later, D. T. Suzuki and Shinichi Hisamatsu introduced them to the West, stating that their spirit was underpinned by ""Zen"". Since then, scholars who study this culture and its manifestations have tended to accede to this assessment.

These positions and explanations of geidō, however, may not reliably reflect its true nature going back as far as the Middle Ages to present. Since: (1) In the historical context, such ""Japanese"" culture was deeply influenced by continental culture. (2) Geidō cannot be

regarded as being exclusively derived from Zen, but rather the influence of Confucian rituals in ancient China, neo-Confucianism of the Song-Yuan dynasties, and Chinese Buddhist sects other than Zen need to be considered as well. In short, it consists of a complex amalgam of various ideological and cultural elements. (3) The term ""traditional culture"" in the Modern era was introduced in order to give this kind of culture some form of 'authority' to compete with the West. The introduction of this term has had a certain effect, however, it also easily gives the impression, opposite to the facts, that geidō has not changed since ancient times. In reality, new elements have often been added and it has evolved in response to the social circumstances that prevailed at different times in history, not only in the Premodern era, but also from the Modern era to the present day.

To gain a new perspective to challenge the former perception of geidō as "Japanese traditional culture", this research project presents some historical and empirical studies that focus on various cultural aspects that have been overlooked.

5. 本年度の研究実施状況

本年度は6回の研究会を開催した。芸美術史、思想史、文学史、庭園史、仏教史、書道史、 芸能史、書物史、などの分野の研究報告を実施したほか、最終報告書作成に向けて班員各位 のドラフトを検討した。

6. 本年度の研究実施内容

2022-06-19 「証本」にみえる日本の書籍文化:清家の経書「証本」を中心として 発表者 王孫涵之 弘前大学 コメンテーター 古勝隆一 明治期の来舶清人の動向について 発表者 呉孟晋 コメンテーター 稲本泰生

2022-07-31 松崎鶴雄の『詩経』学 発表者 陳佑真 帝京大学 コメンテーター 河野貴美子 早稲田大学 海を渡った韓書と漢籍 発表者 矢木毅

2022-09-04 慈照寺弄清亭の再建:明治前期の古社寺保存事業との関連性についての検討を中心に 発表者 宮﨑涼子 京都芸術大学 コメンテーター 神津朝夫 奈良県立大学 平安京の中軸線と南望天闕の伝統について 発表者 外村中 ヴュルツブルグ大学 コメンテーター 水口拓寿 武蔵大学

2022-11-13 執筆計画報告 発表者 神津朝夫 奈良県立大学 発表者 古勝隆一 発表者 成田健一郎 文学研究科 発表者 柳幹康 東京大学 「女もの」の系譜ーー日本のパフォーマンス文化をジェンダーの観点から問い直す 発表者 ガリア・ペトコヴァ 叡啓大学 コメンテーター 重田みち 京都芸術大学

2023-01-08 執筆計画報告 発表者 佐々木孝浩 慶應義塾大学 発表者 陳佑真 帝京大学 発表者 西谷功 泉涌寺 発表者 今枝杏子 神戸女学院大学 燕京大学図書館における蔵書 形成:日本書籍を中心として 発表者 河野貴美子 早稲田大学 コメンテーター 呉孟晋

2023-03-11 執筆計画報告 発表者 王孫涵之 弘前大学 発表者 福谷彬 人間環境学研究 科 発表者 ガリア・ペトコヴァ 叡啓大学 執筆計画報告:総論 発表者 重田みち 京都芸術大学

7. 共同研究会に関連した公表実績なし

8. 研究班員

所内

菊地暁、稲本泰生、岡村秀典、古勝隆一、高木博志、高階絵里加、平岡隆二、呉孟晋 学内

福谷彬、成田健太郎

学外

重田みち(京都芸術大学)、王孫涵之(弘前大学)、柳幹康(東京大学)、上川通夫(愛知県立大学)、竹内有一(京都市立芸術大学)、今枝杏子(神戸女学院大学)、井上治(京都芸術大学)、神津朝夫(立命館大学)、河野貴美子(早稲田大学)、佐々木孝浩(慶應義塾大学)、陳佑真(帝京大学)、ガリア ペトコヴァ(関西学院大学)、水口拓壽(武蔵大学)、宮崎涼子(京都芸術大学)、田中健一(文化庁)、西谷 功(泉涌寺・心照殿)、シビレ ギルモンド(ヴュルツブルク大学)、外村中(ヴュルツブルク大学)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分											
	機関数(必須)	受入人數					延べ人数				
	(234)		海外研究者	若手研究者	若手研究者	大学院生	1	海外研究者	若手研究者	若手研究者	大学院生
		総計		(40歳未満)	(35歳以下)		総計		(40歳未満)	(35歳以下)	
人文研所属		9					45				
(内女性)		(1)					(2)				
京大内 (人文研を除く)		1					5				
(内女性)											
国立大学		2	1	1	1		10	5	5	5	
(内女性)											
公立大学		2					10				
(内女性)											
私立大学		10	1	2	1		50	5	10	5	
(内女性)		(5)		(1)			(25)		(5)		
大学共同利用機関法人											
(内女性)											
独立行政法人等公的研究機関	`	1					5				
(内女性)											
民間機関		1					5				~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~
(内女性)											
外国機関	,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,	2	2		***********		10	10	***************************************	*************	*************
(内女性)		(1)	(1)				(5)	(5)			
その他 ※											
(内女性)											
at the state of th	0	28	4	3	2	0	140	20	15	10	0
		(7)	(1)	(1)	(0)	(0)	(32)	(5)	(5)	(0)	(0)
※「その他」の区分受											
入がある場合											
具体的な所属等名称を											
記載:例)高校教員 無所属の場合は機関数0とカウントし、この欄の記載不要											

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数					
			うち国際学術誌掲載論文数			
①人文研に所属する者の みの論文(単著・共著)	0		0			
②人文研に所属する者と 人文研以外の国内の機関 に所属する者の論文(共 著)	0		0	(0)		
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		0			
④人文研を含む国内の機 関に所属する者と国外の 機関に所属する者の論文 (共著)	0	(0)	0	(0)		
⑤国外の機関に所属する 者のみの論文(単著・共 著)	0		0			

11. 本年度共同利用・共同研究による成果として発行した研究書なし

12.博士学位を取得した学生の数(人)

人数	
	U
	人数

- 13. 費目の30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由なし
- 14. 次年度の研究実施計画なし
- 15. 次年度の経費なし
- 16. 研究成果公表計画および今後の展開等 来年度中(2023 年度中)に共同研究の最終報告書として論文集を刊行する予定である。